



## 第36回

# 「小さな親切」 はがきキャンペーン

今年、36回目を迎えた「小さな親切」はがきキャンペーン(エッセイコンテスト)には、  
昨年を上回る2,074編の応募がありました。

コロナ禍にあるためか、改めて身近な人との関係を振り返り、  
感謝を伝える内容の心打たれる作品が多く寄せられました。

上位入賞4作品をご紹介します。

〔大賞〕

## 二つの花束

三重県 二村直子(51)

「お花のお届けです」

娘のゆうが、高等部を卒業した日の夕方、家に  
花束が届いた。

ゆうは、進行性の筋肉の病気で、特別支援学校  
に十二年間通った。毎日、学校まで送迎し、高等  
部に入ってから人工呼吸器を使うようになった  
ので、母親の私は、学校で待機するようになっ  
た。一緒に通い、一緒に過ごした学校生活だった  
ので、娘の卒業は、私にとっても卒業のような感  
覚だった。

花束の送り主は、中学部の頃にお世話になった、  
訪問リハビリの先生だった。いつも元気いっぱい  
で、ゆうも先生が大好きだった。

「お母さん、ゆうさんがこんないい状態で成長しているのは、  
お母さんが頑張ってきたからやね」と、私にまで気配りをしてく  
ださる優しい女性だった。

玄関先で、花屋さんが二つの花束を抱え、「『ゆうさんへ』と、  
『ゆうさんから』の花束です」と言ったので、驚いた。

『ゆうさんから』と、渡された花束のメッセージカードを見ると、  
『お母さん、十二年間ありがとう。ゆうより』  
と書かれていた。

花屋さんの前にもかかわらず、私は思わずその場で泣き崩れた。  
言葉を話せない娘の想いを代筆してくださった先生の粋な計らい  
が、本当に嬉しくて、感謝で胸がいっぱいになった。

この花束とメッセージカードが、私の十二年間の卒業証書に  
なった。



### 審査員より

訪問リハビリの先生からの  
サプライズに、泣き崩れる  
筆者。自分たち母娘を見  
守ってくれた人の存在が、  
どんなにか嬉しかったこと  
でしょう。短い文章の中に、  
私たちに計り知れない十二  
年間の、ぎっしり詰め込ま  
れているように感じました。  
卒業証書を手にし、一区切  
りついたお二人の日常がこ  
れからも穏やかに続くこと  
を願ってやみません。



# 心から伝えたい “ありがとう”

【日本郵便賞】

## 大切な母の手

千葉県 山田果穂(16)

私の母は、小学校で給食調理員をしています。大きく重い鍋を持つたり、校舎の中を一階から四階まで走ることもあり、大変な仕事です。そんな仕事を毎日こなしている頼もしい母ですが、月に一度、ためらうときがあります。それは、何百人分もの食器を強い洗剤で洗うために、手の皮がむけてしまうときです。

気づくと手を洗っている母は、私を見ると、「汚い手でごめんね」と悲しそうに笑います。その顔がとても寂しそうで、思わず「辞めてもいいんじゃない」と言ってしまうしました。

目を丸くした母は、少し考えて、

「辞めたら、子どもたちの『ごちそうさま』が見られなくなるでしょ」とだけ言って、また手を洗い出しました。

小さい頃から私を何度も勇気づけてくれた、助けてくれた母の手は、今、子どもたちの給食を作る大切な任務に就いています。

四年前までの私は母の手が少し苦手で、「ありがとう」なんて言えなかったけれど、苦労だけでなく、給食調理員の楽しさを教えてもらった今なら、言えると思います。

「お母さん」でも「給食員さん」でも、私はずっと繋ぎたいのは、母の手です。

これまで、本当にありがとう。これから私がその手を引く番になっても、「ありがとう」が繋いだ手から伝わっていきますように。

### 審査員より

娘である筆者から見た母親の絆が心と手で表現され、感謝と温かさが文面いっばいに広がっています。母親の児童への思いや生き様は、素直に娘に通じ反抗期にあたる年齢にも関わらず、尊敬の念が見取れます。親が子に伝えられることとしては、一〇〇点満点。強く印象に残る作品でした。

【審査員特別賞】

## 浴衣マスク

東京都 和田 潤(36)

介護士という職業柄、人の死を目の当たりにすることが多い。介護士としての願いはひとつ。最期の大切な時間を、安らかな気持ちで過ごして欲しい。

しかし、今年には新型コロナウイルスの感染拡大により、家族との面会は中止。最期の時間を大切な家族と過ごすことが、できなくなった。余命宣告を受けたAさんもその一人。Aさんは最後の夏祭りを楽しみにしており、奥様は手縫いの浴衣まで準備していた。しかし、各地でクラスターが発生し、予定していた夏祭りは中止。

「すみません。せっかく縫っていたのに」

奥様に浴衣を返したあと、僕はトイレで泣いた。何もできなくて、それでも何かしたくて泣いた。

七月二十日、Aさんは帰らぬ人となった。感染防止のため、最期まで会うことが叶わなかった奥様。だけど翌朝施設へやって来て、玄関口に僕を呼んだ。その手には、あの浴衣で作ったマスクが七枚あった。「主人を皆さんで見送ってやってください。きっと喜びますから。こんな大変な状況下で、本当にありがとうございました」

奥様は悲しむどころか、僕らを労った。

そのあと奥様が縫ったマスクをつけて、僕らはAさんを見送った。悔しさややるせなさ、それ以上に感謝の気持ちがかみ上げた。

奥様が一生懸命縫った浴衣がマスクとなって、ここに残る意味がきつとあると思った。これからも誠心誠意、介護させていただきます。それが介護士としての使命であり、マスクをくださった奥様の願いだと思っから。

【読売新聞社賞】

## おばあちゃんに返した親切

岐阜県 真崎稔明(39)

「ピンポーン」

冬の寒い日、僕の家のインターホンが鳴った。「お宅の水道管が破裂していますよ」

出ると、隣の家のおばあちゃんだった。

寒さで凍った水道管が破裂して、水が噴き出していた。全く気づかなかった僕に、わざわざ教えに来てくれたのだ。おかげでたいてい水が漏れることもなく、大事に至らずに済んだ。

別のある日、仕事から帰ると、おばあちゃんの家の郵便受けに、かなりの量の新聞がたまっていることに気づいた。心配になり、家のインターホンを押した。でも返答がない。

悪いとは思いつつも玄関のドアを開けて、

「おばあちゃん、大丈夫ですか？」

と声をかけた。家の中から、

「うゝ、うゝ」

と、うなり声が聞こえた。

慌てて中に入ると、おばあちゃんが台所で倒れていた。すぐに救急車を呼んだので、一命を取りとめることができたが、あと少し発見が遅れていたら、危険な状態だったそうだ。

後日、おばあちゃんから「あの時はありがとう。おかげで助かりました」と感謝された。目に涙を浮かべていた。

おばあちゃんから受けた親切があったからこそ、気づいてあげることができた。水道管の一件がなければ、おばあちゃんの家郵便受けを注意して見ることもなかっただろう。

「おばあちゃん、こちらこそありがとう」

僕はこれからも、おばあちゃんを見守っていくことと思っている。

## 入賞・入選者25名

応募総数2,074編

主催：公益社団法人「小さな親切」運動本部  
後援：日本郵便(株) 読売新聞社

### 大賞

#### 【二つの花束】

三重県 二村直子(51)

### 日本郵便賞

#### 【大切な母の手】

千葉県 山田果穂(16)

### 読売新聞社賞

#### 【おばあちゃんに返した親切】

岐阜県 真崎稔明(39)

### 審査員特別賞

#### 【浴衣マスク】

東京都 和田 潤(36)

### フレンドシップ賞

#### 【大相撲とブルーの瞳】

長崎県 福島洋子(51)

### 入選

- 北海道 三沢 聡子(58)
- 北海道 堀山 直浩(13)
- 岩手県 伊藤 貴子(61)
- 山形県 高橋 良征(24)
- 茨城県 吾郷 洋平(29)
- 栃木県 五十嵐竜希(19)
- 栃木県 坂本 達也(54)
- 東京都 金澤 武(19)
- 東京都 川島あゆみ(33)
- 神奈川県 中田 夏菜(26)
- 山梨県 雨宮 源吾(7)
- 静岡県 宮澤 正人(70)
- 三重県 水谷 照子(89)
- 大阪府 近藤 己順(38)
- 大阪府 渡辺 廣之(67)
- 兵庫県 山本 侑真(17)
- 徳島県 田浦 瞳(23)
- 香川県 畠山 一枝(81)
- 大分県 廣田 絢子(30)
- 鹿児島県 上野 弘子(74)